

## 第1回県都デザイン懇話会 概要

日 時：平成24年2月3日（金）14：00～16：05

場 所：県国際交流会館 特別会議室

### 1 あいさつ

- ・西川 福井県知事 （別紙1）
- ・東村 福井市長 （別紙2）

### 2 議 事

#### <座長あいさつ>

- ・西村座長 （別紙3）

#### <資料説明>

- ・事務局（資料1～4）

#### <意見交換>

（国吉委員）

～横浜での取組み～

- ・私は、横浜市で都市デザインの専門家として40年間やってきた。
- ・横浜も戦災・震災を経験。東京の膨張に巻き込まれないで自立していくために何をすべきかを考えた。
- ・横浜は、アーバン（都市）デザインを日本で初めて取り入れた。見て楽しめるまちにして見せ場をつくらないと企業や人も来てくれないという視点で、東京に先んじてやった。
- ・ただ美しいだけでなく、経営戦略に呼応した空間としての横浜を考えた。将来、50年後に造船所をなくすとか、日本大通りをまちの軸にするとか、海が見えるようにする、といったいろいろな目標をつくった。行政・専門家・まちの人が、こうした大きな目標を共有するが細かいところは決め切らずに、少しずつまちの人々と議論しながら一つひとつつくりあげていった。

～福井のまちなか地区での方向性～ ※「提出資料」参照

- ・道路の施設などは、通りごとに個別のデザインが出ないように全体のコンセプトを検証すべき。ただ、対比的にお堀周辺はシンボリックな別な趣があると良い。そこから駅前に通じる軸の部分は、50年かかってもよいから考え方をつくっておいて、ビルの建て替えの時に、例えば3階以上は谷型にしてみようなど工夫ができるとうい。横浜でも、日本大通りでは、ようやく5年前に大きな倉庫がなくなって、港が見える通りになった。

(五百旗頭 委員)

- ・福井県の悩みであり、魅力でもあるのは、「越前」と「若狭」の個性が異なる地域があるところ。これをどうまとめるかは難しい問題かもしれないが、外から来た人間にとっては多様性が魅力である。
- ・新幹線が敦賀まで整備されることは、嶺北、嶺南を併せた福井県は何であるかを再提起するチャンス。
- ・嶺南をどう位置付けるかの問題が欠けると、福井県としてのまとまりがなくなる。その点を喚起することが、私の役割と思っている。

(西村 座長)

- ・福井県は多様であり、県都デザインも奥行きを感じられるものになるといいということですね。
- ・甲府市はワインのまちというイメージがあるが、甲府市の人に聞くと水晶、宝石のまちと言ひ、ワインは勝沼までのことだと言う。外の人間からは、甲府は甲府盆地全体を代表するまちとして売り出した方がいいのではないかと思う。
- ・そういう周辺のことも含めてやるのが、「県都」ではないか。

(八木 委員)

- ・私どもの会社は昭和28年に創業したが、当時父親は28歳であった。だから、若い人の力が必要で、若い人の場をつくっていくことが重要と考えている。
- ・昨年、2030年の会社の姿を議論する場を設けたが、参加を希望した社員の9割は30代。20年後に残る世代である。
- ・そこでの結論は、福井の環境や人口の変化に問題意識を持って、これに伴う価値を創造することがメーカーであるということになった。人口動態が一番の問題で、人口が減少していく中で、どう変えていくかを考えていくことが重要である。
- ・仕入先や販売先のお客さんに福井に来てもらおうと、福井は素晴らしいというが、引退しても実際に誰も住むことにはならない。何か足りないと思うのだが、高齢者が福井に住みたくなるような福井をつくってしまうのもいいのではないか。
- ・福井の強みは、すべてが小さくまとまっていて、土地もたくさんあるので「低層階」でいろいろなものが統一できることではないか。
- ・福井は、人口の割に経済団体の数も多く、経営資源がありながら分散しているので、これらを絞り込んでひとつに決めることが必要。「福井はこれ」と決めるなら、やはり「ものづくり」。ものづくりのベースは人であり、福井県民はまじめで、勤勉。福井には、いろいろなものをつくる所があるので、「福井びと」という形で集約できないか。県都デザイン戦略の中で、ものづくりを見せられたらいい。いろいろな価値を集めて、次の価値をつくり出すような仕掛けがしたい。
- ・コンピューターの技術は、想像をはるかに超えて発展するだろう。箱（大きな建物）は必要なくなり、機能が飛び出して行く。あとは人をどう配置するか。県庁、市役所も50年後には今の場所ではなく、現在の建物をリノベーションして機能分散していきながら、まちなかのどこかに人がいて、次の方向性を示すべきだろう。

- ・学生時代にアメリカのポートランドにいた。美しいまちで、電車をうまく使っている。ひとつ、ふたつ具体的に進めていくとよい。

(西村 座長)

- ・ポートランドも一つのモデルとなる。小さくまとまって、低層階で、高齢者が住みたくなるようなまちにもっていく。役所に関しては、都心部にいろいろなものがあるというイメージもあるということですね。

(開発 委員)

- ・行政支援で3年間、こみちこまち浜町推進協議会を中心にまちづくり活動をしてきた。
- ・最初に「にぎわいの創出」を定義しなければならないと考えた。人通り、売上、県外からの観光客等いろいろあるが、まちづくりの現場として、何をにぎわいと定義すべきか分からなかった。そこで、浜町としては、まずは時代にあった「固有の人間関係の復活」をにぎわいと定義してスタートした。
- ・まちづくりで、地元の人が相互の人間関係を築いてなければ、何も前に進まない。単に行政が予算をつけて整備をしても、一見にぎわいのように感じるかもしれないが、担い手は育たない。自分達でする当事者意識につながらない。
- ・にぎわいを創出する定義をきちっと軸にしてはどうか。それを踏まえれば、空間演出のスタイルが見えてくるのではないか。

(竹内 委員)

- ・お客さんの要望を受けて住宅を造っているが、完成しても、周りの環境に合わないこともある。1戸の家だけではよい家づくりにはならないと、日ごろの仕事の中で感じてきた。
- ・デンマーク郊外の住宅を視察した時に、高齢者の住宅を訪問して、素敵できれいな環境で驚いた。モデルハウスに住んでいるような環境であった。
- ・デンマークでは、どのような（不自由な）状態の高齢者でも、心も体も元気であった。なぜかと考えたが、やはり安心して生活できるということ。自分のやりたいことが何とかできる社会システム、環境整備、楽しめる場所があることだと気が付いた。
- ・福井県は幸福度1位と言うが、私の周りの人たちは実感していない。他人からでないと分からない。内に住んでいる人が良いことを感じられないのが悲しい。住んでいる人たちが、住んでいるところに愛着を持って暮らすためにはどうすればいいか。
- ・コレクティブハウスを造ろうと活動している。地縁、血縁が強い福井で新たな縁をつくるのは難しい。人間関係でコレクティブハウスをつくれればいいと言われて、田原町でまちづくりの活動をしている。
- ・この活動に参加してくれた人が大事だと思ったことは「自発」ということ。福井は昔から地域のグループ（青年会、婦人会）があるが、半強制である。田原町に

住み続けたいという有志で活動している。「楽しいことを見つけること」が合言葉。参加できる時期に、参加できる人たちがやっていけばいいと考えて活動している。

- ・まちづくりは、生活を続けていけば自分のことであるが、みんな誰かがやってくれると思っている。田原町では、難しいことではなく、玄関先で同じ鉢で植物を植えて線につながれば、それがまちづくりになるということから始めた。
- ・県都デザインでは、今後、ワークショップやアンケートを行うとしている。自分の生活と県都デザインがどう結びつくのか、自分の生活の中に見えるような仕掛けができればいいと思う。

(西村 座長)

- ・県都デザインを生活とどう結びつけるかは難しいことではあるが、幸せを実感できるような住まい方を考えていくということですね。

(吉田 委員)

- ・福井市の都市計画は、昭和10年代から始まっている。戦争に入り、戦後復興でもなかなか進まず、震災で一気に道路拡幅、住宅移転が進んだ。
- ・私はその頃に生まれたので、小学校以来、福井市は災害から近代的なまちづくりに積極的に参加した市であり、誇りを持ってよいと言われてきた。当時は公園も多く、下水道も進んで全国的にもまれと言われて育ってきた。
- ・当時から、いつも金沢と比較して言われた。金沢は、道は狭いし複雑で交通の便も悪い。福井は整備されていていいと言われてきた。それがいつの間にか自慢できるようなものになってきている。
- ・それぞれの所では、早くから気付いて何とかしようとやってきているが、将来に向かったのデザインという形ではやってこなかったのだと思う。
- ・福井のまちに対する市民自体の自信、誇りもだんだん失われてきたのではないか。金沢に比べても、だんだん遅れてきていると分かる。福井のまちはダメかと思ってしまう。
- ・福井は戦後一步進んだ形で整備されたが、それがどこかで遅れたのなら、一回りしてその先を進む形をつくるのが重要である。福井市民が福井のまちをいいまちだと実感できるものをつくらなければならない。
- ・幸福度1位を実感できなくても、客観的に位置付けてくれば、そう思い込んでそうなるようにするのはないか。
- ・坂本竜馬が福井藩から五千両を借りたと言われていたが、資料にもなく、歴史的必然性もない。(千両は借りている。)いくら借りたという問題ではなく、竜馬が海軍操練所を造ることを福井藩に報告に来たことが、福井が歴史的にも大きな役割を果たしてきたことになる。それが、福井は自慢してもよいということにつながる。
- ・福井の自慢できる歴史的な事象が、資料の中からも発掘できるかもしれない。それが市民にとって福井のまちを自慢できるようになれば、人が集まり、にぎわいにつながるのではないかと思う。

(西村 座長)

- ・福井自慢を発掘して、それをデザインの手がかりにすること。

(国吉 委員)

- ・横浜は40年前は戦後復興もなされず、取り残されたまちであった。
- ・区画整理をやるにも、もうまちが動いているので、やらないことになった。そういうハンディキャップをうまく見せようと、ごちゃごちゃしたまちと、みなとみらいのような整備したまちの対比を見せることにした。
- ・実際、横浜はきたないまちであったが、小説などではロマンチックなまちと紹介され、イメージが先行していたのでそれをコンセプトとした。エキゾチック、ロマンチックなまち、焼け野原になったが歴史の感じるまちとした。周りに言われていることを取り入れた。
- ・そこで重要なのは、住民との合意、納得できる要素である。福井の場合は、幸福度1位かもしれない。
- ・「にぎわい」とは、まちの活動である。例えば、横浜で商店街を整備する時に、銀行が15時以降はシャッターを閉めることに着目して、1階をショールーム・休憩所として演出し、銀行の店舗は2階以上にできないかということを進めてきた。
- ・景観法は姿・形だけを規制し、活動については規定していない。人が活動している姿を含めたものが本当の景観だと考え、条例では景観法にないにぎわいのために1階、2階でのショッパの推進や駐車場の入口をできるだけ小さくするなど、にぎわい空間づくりを義務付けた。
- ・担い手について、横浜人は普段はばらばらであるが、何かやるときは1つになれる。例えば、横浜スタジアムを民間の寄付と政府の補助でつくった。PFIのはしりのようなものである。
- ・横浜は、それぞれのまちで競い合いながらも、何かあった時には民間のリーダーを中心にまとまれる。

(五百旗頭 委員)

- ・県都デザイン戦略が、福井全県内でどう受け取られるかが心配である。福井県では、原発の問題が平成25年度の嶺南の市町の予算に影響を与える。平成24年度は、頭を悩ます1年となる。
- ・その中で、県と福井市が市の中心をどうするのか、さらにそれを実現するための予算をどうするのかということのを他の市町がどう受け取るか。
- ・そのためにも、県都デザイン戦略をやるのが、他の市町にとっても相乗効果があることやモデルになるということのを積極的に発信していくことが重要である。
- ・福井の道は、拡幅したことで、商店街にとってはジグザグにお店を見ることができないマイナス面もある。これは、戦後に道を拡幅した敦賀のまちにも当てはまる。

- ・県都デザイン戦略は敦賀のまちの参考になるし、敦賀で考えていることが県都デザイン戦略にも役立つ。そのようなコミュニケーションを官民間わず、つくることが重要である。
- ・また、一例であるが、敦賀市の駅前整備と福井市の駅前整備がお互いにどう引き立て合っているのかを考えていくことも重要である。
- ・越前と若狭のそれぞれの魅力を引き立て合うことが重要になってくる。越前は、歴史的には、一向宗により一度破壊され、また、近現代では戦災、震災もあり、失ったものもある。若狭は歴史の積み重ねの土壌があり、越前は偲ぶ土壌だと思う。全てが残っていないからこそ、来た人の想像力が刺激されて過去を偲ぶのだと思う。
- ・福井県の文学を考えた人に則武三雄（のりたけかずお）という人がいる。彼は、米子の出身で、戦後、福井を次の住み家とし、福井城の堀の水面の詩を多く残している。それは昔のことを思い出すからで、戦前の日本を偲んだのかもしれない。
- ・新幹線ができて、観光客が福井に来て、福井のことを偲ぶ。また、2泊、3泊する中で東京、大阪のことを偲ぶ。それは旅をして良かったということの意味であろう。
- ・「雪明（ゆきあかり） あはき街跡にたつかげや 燈（ひ）のなき假家（かりいへ）に 人かへり住む」という詩がある。戦後の福井市の様子を詠った詩だと思う。これは、戦後の初代福井市長で、近代的な福井市をつくった熊谷太三郎の詩である。彼は詩人でもあり、歌集の「雪明（ゆきあかり）」に収められた一つである。彼も古いまちが失われたこと、その中で人が生きてきたことから出発して、近代的な福井市をつくり上げたのだと思う。
- ・そのような偲ぶ力、思い出す力が福井の資産の一つだと思うので、これを活かすまちづくりになればと思う。
- ・福井の道は広いので、いろいろな視界が開けて、その立ち位置からいろいろなもの（足羽山、福井城、遠くの山、川、建物）が見える中で、偲ぶことができたらと思う。

#### （下川 委員）

- ・福井の内側からの人間から言うと、福井のまちづくりの特徴は、何かやろうといった時に、一部の人間しか集まらず、その他の人はそっぽを向いている。また、少数でなくいろいろな所に同時多発的に活動する人が現われてくるのが特徴のような気がする。
- ・その同時多発的に行われているものは別々のものであって、ベクトルがそろっていてもなく、賛同を得ることでもなく、ぽっと咲いて、ぽっと消えていく集団がたくさんいる。その集団は目標を持っている訳でもないが、この福井をどうにかしたいという気持ちで活動している人がとても多い。
- ・なぜ今まで、大きなベクトルをそろえるような大きなテーマが福井県にはなかったのか。行政はマスタープランなどの計画は作っていて、テーマはあるが、実は住民が知らない。知っていれば、住民は二の手、三の手を考えるが、なぜ知らな

いのであろう。ついには、住民がまちづくりに関心がないということにつながってくる。

- ・どのように福井のまちをつくっていかうかとする行政の情報の出し方や、いかにしてキーワードを定めて、それを県内だけでなく、県外にも発信していくのかを徹底的にやらないと、ここで議論をして何か動き始めても、このグループだけの話になってしまい、住民にはあまり関心のない話になってしまう。
- ・住民にまちづくりにもっと参加してもらうためには、行政や我々がどのような情報の発信の仕方をすべきか検討していく必要があると考えている。
- ・今後キーワードとして出てくるであろう歴史、産業、教育、環境、住環境などをうまく情報発信していければ、先が開けてくるのではないか。

(開発 委員)

- ・市内には古いだけの建物と見過ごしてしまうものもあるが、建築史として価値のある近代の建物がたくさんあるらしい。それらを市民の誇りにつなげていく。
- ・近代の1シーンが残っているまち、珍しいものを確認する要素になる可能性があるのではないか。

(西村 座長)

- ・昭和レトロやアーリーモダンみたいなものがあるまちがおもしろいのではないかと  
いうことですね。

(西村 座長)

- ・この懇話会が発足したのは、30年、40年経つと、県庁も市役所も周辺の建物も建て替えなければならないことがある。今後も城の中に県庁があつていいのかということ、そう遠くない時期に判断しなければならない。
- ・県庁も市役所も今の場所から出ていくとすれば、我々は都心がどうあるべきかを議論しなければならない。また、単純な抽象的なあるべき論だけでなく、実際都心をどうやるのかという大きな方向を議論することが要請されているのだと思う。
- ・今回は初回なので、フリーでみなさんのご意見をいただき、次回以降は、今回いただいた意見を最終的にどのように集約していくのかを議論していきたい。その間に、県民からの声を聞く機会や情報発信をしていくことが必要だと思う。
- ・福井の城は、外堀から徐々に埋めてきた歴史がある。最初から、お城に根ざして堀端通りなどを計画するような歴史的な順番にはなっていなかった。
- ・素晴らしいお堀があるが、お城の周りに行くようなアクティビティがない。別のアクティビティをつくれれば、他のものが生まれてくるかもしれない。そのようなものをつくってこなかった歴史がある。これから、どう直していくか。
- ・福井は、お堀の周りに大きな道がない。逆に、歩いて行けるようなお堀としてとらえ直すことができるかもしれない。歩いていけるアクティビティは何なのかも考えなければならない。

- ・また、都心から県庁、市役所がなくなっていいのかというと、都市がだめになってしまうので、都心には残ってもらいたいというのが共通認識であろう。
- ・建て替えの中で、いろいろな形で変化が起こり、うまく再生されるイメージが生まれるためのキーワードは何か、何を大事にしていけばいいビジョンが生まれてくるのか、皆さんのインプットで少しずつ先に進めていきたい。
- ・最終的には、都市の中心部の将来の大きな方向性に議論を集約していければありがたい。今後、参考となるようなアンケート等も実施して、この懇話会に反映していきたい。

(森近 県政策幹)

- ・福井がどのようなまちに進んでいったらいいのか、自信を失くしているのではないかと、どのようなにぎわいを考えていくのか、まちづくりに地域の人に関わっていかなければならないのではないかなど、ご議論いただいた。
- ・シンボリックなものを何にするのか、その方向性を提言いただければありがたい。
- ・まちづくりは県民、市民が一緒になって考えて、コンセプトが一つにならないと進まない。県庁、市役所、周りの民間の施設も更新時期にきているので、どのようなまちになっていったらいいかを考えて、一つひとつ手がけていかなければならない。ここで、ある程度一つにまとめたものを 50 年後に示せるように提言いただきたい。

(藤岡 市特命幹)

- ・市は来年度、西口駅前広場と西口再開発の広場の空間を具体的に設計していく。県都デザイン懇話会の議論と一体的に進めていきたい。



## 西川知事あいさつ

本日は、雪の影響もあり足下が悪い中、ご多忙の先生方には、第1回県都デザイン懇話会に御出席いただき、ありがとうございます。

昨年12月に、北陸新幹線の敦賀までの区間の10数年後の延伸がほぼ決定し、新しいまちづくりを決める絶好の機会となっています。折しも、この県都の中心部は、県庁や市役所、その他の公共施設も一定の年齢を迎えており、大きな方向性を考えながら将来の準備をする時期でもあります。

一方で、北陸新幹線は2年後に金沢まで開業し、道路は、関西から小浜、敦賀までの舞鶴若狭自動車道が北陸道と直結します。また、福井から永平寺、勝山、大野、岐阜に向けての中部縦貫自動車道も延伸となります。将来の方向が決まり、いずれも大きな流れが出ました。これらを前提に、まちづくりの基盤としてさまざまなことが考えられると思いますので、思いきった方向付けをお願いします。

特に、この中心部の県都のまちづくりについては、いくつもの計画がありますが、いかに実行に移せるかが重要です。福井には歴史と文化があり、これを歴史の上だけでなく、実際のデザインとして役立てることが重要ですが、多くは震災や戦災などで地下にあるので、これをいかに活かしていけるかだと思います。

また、北陸3県は、富山、石川、福井が特色を持ちながら競争関係、選択の関係にあります。こうした中で、地元として、県都がいかに特徴をもってより魅力ある地域になるかという視点を持っています。

さらに、福井の県都の特色として、県庁や市役所、駅やデパートなどが日本の中で最も近接した位置にある珍しい県であり、一方で、バブル、高度成長期に公共的な施設が郊外化しており、商店街が中心にあります。大型の店舗が郊外にある地域構造にあります。こうした中で、どのような新しい方向付けや考え方を提示できるかと思っています。

県都福井をどのようにデザインしていくか思いきった議論をしていただき、我々のこれからのまちづくり、県民・市民の方向付けになるよう、よろしくをお願いします。

## 東村市長あいさつ

第 1 回県都デザイン懇話会の開会に当たり、一言御挨拶を申し上げます。

昨年 10 月の県都デザインフォーラムでの提言を踏まえ、本日、県都デザイン懇話会の第 1 回が開催され、県都福井市のまちづくりのための議論をさらに深めていただくこと、そして福井県と福井市が引き続き協力をして県都のまちづくりに向けた取組みを行うことができることを、たいへんうれしく思います。

また、この懇話会は東京大学の西村幸夫副学長をはじめ、県外から 4 名の皆様と、地元福井から 6 名の皆様をお迎えし、合わせて 10 名のメンバーにより進めていただくことになりました。いずれの方々も、多方面でご活躍されており、公私ともにたいへんお忙しい中、また、本日の大雪の中をこうしてお集まりいただきましたことに、心から厚く感謝申し上げます。どうもありがとうございます。

さて、昨年末、福井県、福井市にとって最大の懸案事項であった北陸新幹線の金沢・敦賀間の整備方針が示され、平成 37 年度開通の見通しが出てきました。待ちに待った方針であり、26 年度の金沢開業、あるいは平成 30 年の国体開催を見据え、一日も早く福井開業を実現するための取組みをさらに進めていかなければならないと考えています。併せて、福井駅西口再開発、あるいはえちぜん鉄道の高架化などの駅周辺整備、そしてえちぜん鉄道と福井鉄道の相互乗り入れの実現などの課題に対しても、県と協力しながらスピード感をもって取組みを進め、県都福井市の魅力を高めていかなければならないと決意を新たにしているところです。

一方、少子超高齢化、人口減少社会を迎え、社会保障費が増大する中、また税収が低迷をしていることもあり、今後厳しい財政環境が予想されます。従って、今必要な投資は確実に行う一方で、既存インフラを最大限活用し、長期的な視点を持って時間をかけてまちづくりを進めることも必要と思っています。福井市の主要な公共施設は多くがまちなかエリアに立地しています。また、福井駅周辺には多様な機能がコンパクトにまとまっており、笏谷石のみの石組による福井城址、あるいは足羽川・足羽山の自然も身近にあります。こうしたまちなかエリアの特性を活かしながら、素晴らしい将来像を委員の皆様とともに描いていくことができればと思っています。

本日の県都デザイン懇話会でいただく熱心な意見の交換が、2050 年に向けた県都デザイン戦略の本格的な議論のスタートとなります。ぜひ、それぞれのお立場から、積極的な御提言をいただき、今後の県都福井市のまちづくりの指針として活用させていただけるようお願いし、私のあいさつとさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

## 西村座長あいさつ

先ほど西川知事の話にもありましたが、福井は、駅とお城と市役所と県庁とそれから中心市街地が本当に歩いていけるところにあるという非常に稀な都市だと思います。これだけ中心の諸施設が集中している県都というのは、福井のほかでは甲府が近いと思いますが、あとは大体どれかが遠くにあります。

その意味で、そういうところがこれから先、かなり近いうちにいろいろな形で建て替えの時期にきているので、都心を様々に、将来どうあるべきかを、今、議論して考えていく良い機会であると思います。

また、これも先ほど知事、市長からもお話しがりましたが、新幹線開業のスケジュールが出て、ひとつの目標ができたということで、議論の大きなタイミングではないかと思います。

昨年 10 月に県都デザインフォーラムが行われ、私が基調講演を行いました。委員の皆様の手元にある記録集の中に、その時の発言要旨が載っていますが、私も、いろいろ提言をさせていただきました。

そのフォーラムで、知事、市長に続けてご挨拶いただき、今日もラウンドテーブルでお二人が並んで座って議論に参加していただけるということは、本当に稀な機会だと思います。ほかの県でも、県都で両トップがこういう形で議論するというのは、なかなかできるようでできないものです。

それはおそらく、今のように様々な社会情勢が、都心を協力して何とかしていくことが必要だという強いニーズを共有されておられるからだと思います。

これから、何度かここで皆様と議論し、何らかの将来構想や当面やるべきことを提言して、この懇話会としての提言を県、市に出すことを、来年度いっぱいかけてやりたいと思いますので、是非、積極的なご参加、ご協力をお願いします。

また、県、市のそれぞれの事務局にサポートしていただき、本当にありがとうございます。どうぞ、今後ともよろしくお願い致します。